

昭和史小考(1)

神谷 正彦*

A study of the Syowa era history(1)

MASAHIKO KAMIYA*

Abstract

We together with the citizens of our countries, mourn all who died in the World War .And honour those who fought to end it. We are compelled to remember the lessons of that war, which inflicted loss of life and destruction on an unprecedented scale. But I offer a new point of view about that war, which Japan made a great contribution to world peace.

1. 序

岡目八目という言葉なら誰でも知っている。しかし本稿は囲碁の話ではない。

歴史学などまったくの素人の筆者が、歴史の教科書にはあまりとらわれないで、そうはいっても憶測推測はできるだけ排したうえで、いわば隠れた名面を発掘するように、ちょっとしたスリルを味わってみたいのである。

たとえば、井沢元彦「逆説の日本史」(小学館)のように、大胆かつ細心な歴史の再評価に挑んでみたい。つまり、織田信長は比叡山の焼き討ちを行ったから残酷無比な男だ、という前に、僧達は武装して僧兵集団となっていたことを忘れたくないのだ。三角錐も円柱も横から見れば三角形だが、上から見れば形が違う。人間の評価も歴史の評価もそうありたい。

1492年、コロンブスがアメリカ大陸を発見した、と教科書にはそう書いてある。だがほんとうにそうか？先住民がコロンブスを「発見した」のではないのか。

都会の人は、田舎へ来て田園風景を見ると、美しい自然だとほめる。だがあれは「自然」ではない。山林を切り開いて田や畑に変え、生態系を壊して人間が欲しい作物だけを育てている、いわば自然破壊の人工美である。

誰がどんなに見方を変えてみても、評価が固定しているなどというのは、アドルフ・ヒトラーくらいであろう。

ずっと不思議に思ってきたことがある。歴史の授業はなぜ、現代史にあまり時間をかけないのだろうか。現代人に密接に結びついて、価値観を作り上げてきたのは埴輪や古墳なのか？激動の昭和史ではないのか。大学入試に出ないから教えない、とするならば、なぜ入試に出ないのか。これは一国の歴史教育としてはたいへん奇妙なことである。

だから、外国から、日本人は歴史認識が薄い、などと批判されるのも理由は簡単である。「知らない」からだ。どうも戦後は、戦争時代を見ざる言わざる聞かざるで済ませてきたようだ。知らないことは教わらなければわからない。けれど知らないままで許されることとそうでないことは、ちゃんとある。

調べる方法も時間もじゅうぶんあるのに、知らないままでいてその結果世界に通用しないのはあたりまえである。

1931年から1945年までの歴史を考えたり話し合ったりすることがもし、タブーになっていてそこだけ空白、などということはとうていあってはならない。なぜなら、その15年の間に310万人もの日本人が犠牲になっているのだ。こんな短期間にこれほど多くの死者が出たことはない。もしも、どうしてそんなことが起こったのかを、私達が知らないまま忘れてしまったら、その時こそ、310万人が「本当に」死ぬときなのである。

日本は敗戦国として、連合国によって極東国際軍事裁判で裁かれた。その結果、文官広田弘毅を含む7人の軍人が絞首刑となったが、「知らない」人々だけがこの判決で戦争に終止符が打たれたと思ってい

る。皇民化教育を広く国民に浸透させたのは誰だったか。軍の御用機関となって、国民を戦場へ駆り立てたのは誰だったか。聞こえはいいけれども、「一億総懺悔」のまやかしにごまかされてはいけない。

戦後、毛沢東が、日本軍が中国に派兵してくれたおかげで宿敵の国民党に勝利することができた、と語ったことなど、印象深い。

また、日本軍が1941年12月7日、ハワイを空襲した翌日、ルーズベルトは議会で演説し、アメリカは孤立主義を捨てて第2次世界大戦に参戦した。ところが、この空襲に先立って対米宣戦布告がなされるはずであったのに、日本大使館員の国賊的ともいえる怠慢と無知のために、通告は約1時間もおくれてしまい、これが「真珠湾の騙し討ち」としてルーズベルトに利用されてしまった。

この時期の日本人の思考パターンを司馬遼太郎は「まるで国民全体が魔法にかけられたよう」と評している。そうかもしれない。戦争の目的さえはっきりせず、陸海軍の協力はすれちがいばかりだし、中国では膨大な戦費を費やしている。エリート軍人を養成したのに、彼らには国際感覚もなく、時代の変化にも取り残されてしまっていた。

要するに、島国根性丸出しだったのであろう。ダーウィンの進化論に困んでいうと、日本人は世界の中で「ガラパゴス化」していた、というほかはない。

—

写真は事実を写すが、その事実は事象の全体ではない。一瞬の映像で切り取られた事実にすぎない。それをいくら集めてみても全体像にはほど遠い。また、集めていく段階でこぼれ落ちてしまう事実も多くなるのは致し方ないことである。

メディアは今年の夏もまた、平和の尊さを声高に訴えていた。それは、「草の根の反戦メッセージ」の形であったが、戦後65年という歳月は戦争体験者をいやおうなく高齢に押しやり、後世に伝えるべき記憶の数々はますます風化していくだけに、必要な形ではあった。第2次世界大戦は、人類が初めて遭遇した総力戦であり、大量破壊兵器の時代であったから、被爆者や引き揚げ者、抑留者など、辛酸を舐めさせられた国民の数は計り知れない。そのメッセージの重さを改めて痛感させられた。

しかし、客観的な歴史認識こそが後世に残されなければならない、というところがポイントなのである。一市民達の悲劇を惹起したのは、世界各国の指導者たちそれぞれの思惑があり、誤算があり、駆け引きがあったからである。1937年から1945年まで

の8年間、日本だけでなく世界を未曾有の悪夢に陥れた歴史のダイナミズムから見れば、市民レベルの証言ではやはり不十分なのである。

さてここで、本論の論旨から必要なので、第2次大戦の経過を簡単に整理しておく。

第2次世界大戦は、1939年9月1日、国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）党首で、自らを総統と称したアドルフ・ヒトラーがポーランドに侵攻し、9月3日イギリス・フランスがドイツに宣戦布告して始まった。これは前年の1938年、ソ連の共産党書記長ヨシフ・スターリンとの間で締結された独ソ不可侵条約に付帯した、ポーランドを独ソ2国で分割統治するという密約に基づくものであった。

この年にはオーストリアを併合し、チェコスロバキアのズデーテン地方も占領したヒトラーの領土的野心はとどまるどころを知らず、1940年にはオランダ、ベルギーを屈服させ、遂にフランスをも手中に収めた。この、機甲部隊による電撃戦の勝利が、ヨーロッパから遠く離れたアジアの軍国主義国を沸き立たせた。その結果、侵略主義者でしかないヒトラーの信奉者が、陸軍内を始め政府内に現れ、その代表格の外相松岡洋右は1940年9月、日独伊三国同盟を締結してしまった。この7年前の1933年には同じ外相松岡が大演説をぶって国際連盟を脱退していたから、日本の世界的孤立は決定的になった。日本の未来は、悪魔のヒトラーに魂を売ったことで完全に潰えたのであった。

しかし、ヒトラーを賛美する者達は軍人・政治家を問わずヒトラーの本質を見抜いてはいなかった。ただ単にドイツ軍の破竹の進撃に酔っていただけだった。彼らはドイツがソ連に勝利するのは時間の問題だと信じて疑わなかったから、スターリンが兵器工場をウラル地方へ移したことも知らなかった。

それは、1931年の満州事変を皮切りに、盧溝橋事件、上海事変を経て、1937年首都南京が陥落してもなお屈服しない蒋介石との戦いに軍部が倦んでいたのかもしれない。彼は巧みな政治力で連合国の援助を取り付けていた、もうむかしの弱兵中国ではなく抗日でまとまった中国に生まれ変わっていたのだ。日本軍だけがその実態を理解せず、ヒトラーの快進撃にあやかりたいという「神懸かり国家」日本の姿だった。

日中戦争たけなわの1938年まで、ドイツは中国に対し、最も大量に武器を売り込んでいた。しかも、三国同盟締結後もヒトラーは中国へ秘密裏に武器を売ることを承認していた。そして何より、アーリア人純血主義のヒトラーが、有色人種の日本を本気で支援するはずがない。ヒトラーにとって三国同盟は

日本の傀儡国家満州と長い国境線を接するソ連を日本が牽制してくれることを期待する、という実利的独善的な計算に基づいていただけなのである。

ヒトラーの第三帝国建設という野望は、ミュンヘン会談の合意も独ソ不可侵条約もあつて反故にしている。このような信義のかけらもない男に心酔するような指導者しか持てなかったところに日本の悲劇はあった。

さて、1941年末には欧州で中立を保ったスイス・スウェーデン・ポルトガルを除けばあとはナチスドイツの同盟国かその傘下に入る国ばかりとなった。この時点でヒトラーの領土的野心を阻止できるのはソ連のスターリンだけだと考えられていた。1941年夏にドイツ軍はソ連に侵攻し（バルバロッサ作戦）首都モスクワに肉薄したが、秋の大雨と11月の冬将軍に阻まれていた。スターリンはいち早く工場をウラル地方に疎開させていたため、工業生産力は衰えることはなかった。一方、ドイツ軍は夏の装備しか持っておらず、延びきった戦線への物資補給が滞り戦局はしだいに膠着状態に陥った。ソ連の厳冬がドイツ軍の進撃を止めたのである。

この前年には、イギリスが、バトルオブブリテンと呼ばれる航空戦に勝利しており、ヒトラーはイギリス本土上陸作戦を中止したという経緯があった。したがってドイツは大国ソ連と不屈のイギリスに挟まれたわけである。

ヒトラーは考えた。圧倒的工業生産力を誇るアメリカが参戦する前にソ連を倒して資源を確保し、イギリスとソ連の連携を断って孤立させればイギリスは戦意を喪失し、アメリカが参戦する理由もなくなる、と。しかし、ここでヒトラーの最大の誤算が生じた。三国同盟の同盟国としてソ連に宣戦布告してくれるものと期待していた日本が、1941年12月8日、アメリカの太平洋艦隊に奇襲を敢行したからである。

日本はアメリカから1939年来厳しい経済制裁を受けて石油、鉄鋼を禁輸されており、自存自衛のためオランダ領インドネシアの石油を獲得すべく、「南進政策」を取らざるを得なくなっていた。1939年日本軍はソ満国境のノモンハンでソ連軍と軍事衝突を起こし大敗を喫している。この敗北の影響もあって対ソ戦ではなく対米戦必至の南進策を取ろうとしていたのだ。

日本軍の真珠湾攻撃の翌日、ルーズベルトは議会で演説し、真珠湾は対米宣戦布告の55分前に攻撃されたことを強調、対日宣戦を議会で承認させた。これで「眠れる獅子」アメリカは晴れて第2次世界大戦に連合国の一員として参戦できることになったの

である。じつにこの時、日独伊枢軸国の命運は尽きたのである。というのも、第2次世界大戦は総力戦であり、情報戦であり、石油争奪戦だったのだが、枢軸国側は、このいずれの戦略においても敗北しているからである。

二

当初、筆者が本稿で訴えようとしたのは、日本とドイツの指導者達の資質や誤算、その原因であった。それは別稿で述べることにし、ここでは、第2次世界大戦に於いて日本が果たした役割について、新しい視点から述べたいと思う。

日本軍は戦争の目的も不明確なまま、日中戦争から太平洋戦争へと進んでしまった。これに対し連合軍が目的としたのは、日独伊枢軸国に勝利しこれを解体することにあつた。とりわけ1939年にポーランドに侵攻して第2次世界大戦を始めた独裁者ヒトラーを倒すことであつた。1945年5月にドイツを降伏させた功績は誰のものであろうか。

教科書的に言えば、アメリカ、ソ連を中心とする連合軍が枢軸国を倒した、ということになる。しかし、そこへ至る過程は単純なものではなかった。それを銘記しておきたい。

単独で枢軸国を破れる国はなかった。原子爆弾は未完成だったし、日本の軍事力は侮れなかったからだ。実際、太平洋戦争開戦時の日本海軍はその陣容、戦闘力いずれもアメリカ軍を凌いでいた。陸軍も日清・日露戦争以来無敗を誇り、国民には皇民化教育が徹底されていたから兵力も士気も十分であつた。アメリカ大統領ルーズベルトは、第2次世界大戦に参戦しないことを公約として大統領になった。本心ではイギリスを援助し、中国に於ける利権を守りたかつたが、参戦するには議会の同意が必要だ。強力な理由が欲しかったその時に、洋上5000キロの彼方から“理由”がやってきたのである。アメリカの領土が攻撃されたというだけではなく、駐米の日本大使館員の信じられないような職務怠慢により、宣戦布告前に奇襲が始まりアメリカ国民が2400名余も犠牲となった。しかも、損害はすでに老朽化した戦艦で、空母群や工廠、石油タンクは無事だということから、彼にとってこれは望外の展開であつた。

翌日の議会で彼はこの空襲を最大限に利用し、パールハーバーは日本軍に騙し討ちされた、12月7日は恥辱の日になった、と演説したのである。その結果は彼を完璧に満足させるものであつた。思えば、屑鉄や石油を対日禁輸とし、国内の日本資産を凍結させ、ハル・ノートを突きつけて、と矢継ぎ早に日

本を挑発してきたことがようやく実を結んだのである。

真珠湾攻撃は、連合艦隊司令長官山本五十六が対米戦は必ず負けるという前提で行った大博打だった。日独伊三国同盟に反対し続けた彼は、皮肉にもこの作戦を行うことになってしまったが、緒戦に勝利できれば早期講和も可能だと信じていた。持久戦になれば日本は資源に乏しく工業生産力も低いから本土が戦場になってしまうことを見抜いていたのである。しかし、前述したように真珠湾攻撃は中途半端に終わり、早期講和の条件にはならないばかりか、国民はみせかけの勝利に酔って講和どころではなくなってしまった。クラウゼヴィッツが言うように「戦争は外交の手段」なのに、である。歴史家は、この作戦を山本自身が直接指揮すれば戦略的に成功していたらろうという。(だが実際には、指揮官は水雷出身の南雲忠一だった。戦争という非常時に海軍は年功序列の人事を行っていたのであった。) ハワイを占領し、多数の捕虜を講和の条件にできた、ともいう。

こうして、日本の国運を賭けた乾坤一擲の大作戦は、日本側にとっては戦略的成果とはならなかった。

しかしこれを大戦全体から見れば、アメリカを参戦させるという、大きな転換点になったのである。アメリカ議会は、日本の南部仏印進駐やフィリピン奇襲、マレー半島上陸くらいでは重い腰を上げなかっただろう。じっさい、陸軍がマレー半島に上陸したのは真珠湾攻撃から1時間前だった。かねてから、ルーズベルトは「最初の一撃」を日本にやらせたかった。日本の外交電報を解読できていたからには、日本軍がどこへ奇襲をかけてくるかをルーズベルトは既に知っていたのか、これは今もって真珠湾攻撃の大きな謎の一つになっている。

謎といえば、重大な事実がある。2002年、真珠湾の沖合の海底で、ハワイ大学の海洋調査船が、沈没している特殊潜航艇(甲標的と呼ばれていた)を発見している。日本軍の兵器であることを、元日本軍乗組員が確認した。司令塔に被弾の痕跡がある、この艇を撃沈したのはアメリカ太平洋艦隊の駆逐艦ウォードであったことは記録がある。

駆逐艦艦長は直ちにハワイの司令部に報告したが、なぜかこの報告は重大視されず、約1時間後に真珠湾攻撃が始まったのである。したがって、明白な戦闘行為を軽視した、つまり日本軍の「騙し討ち」という形になった責任はアメリカ側にあるのであって日本側にはない。ただ、この「ウォード報告」が単なる連絡ミスか判断ミスで軽視されたのか、それとも意図的に握りつぶされたのかはまだ解明されていない。

真珠湾攻撃には5隻の特殊潜航艇が参加したが、1隻は拿捕され、4隻は母艦に帰らなかった。ルーズベルトはこの一隻を「東條の葉巻」と呼んでアメリカ中を引き回し、戦時国債を6000万ドル集めたという。また、「真珠湾攻撃調査委員会」を設置したが、そこでは攻撃以前にたびたびクジラを潜水艦と見誤る例が報告されていること、駆逐艦ウォードの報告もこのような誤報として処理されていた、ということを明らかにしたただけである。

要するにアメリカは油断していたのである。真珠湾の推進は12寸ほどしかないので、航空機による雷撃は不可能だと考えられていた。しかし日本海軍は魚雷推進部に木製の安定板を取り付け、浅海雷撃訓練を徹底させて不可能を可能にしていたのである。日本の軍事力を見くびって失敗した責任を、宣戦布告の遅れという日本側の失態に負わせたのである。かくして、日本海軍の真珠湾攻撃は歴史上、ひじょうに意義深いものとなった。

ルーズベルトとチャーチルにとっては、ヒトラー打倒のための天の配剤となった。アメリカは第2次世界大戦に参戦でき、これ以後は兵器を大量生産し始め、軍事超大国となっていく。

軍事的には、航空機による艦船攻撃が戦争を大きく変革させた。制空権の重要性が世界に認識されたのである。しかし、日本海軍の弱点も露呈した。第2次、第3次の攻撃を中止して反転帰投した連合艦隊は、短期決戦が当初の目的であったにもかかわらず艦隊保全主義のため攻撃は徹底せず、それを司令長官が翻意させることができないという硬直した命令系統と人事(ハンモックナンバーによる序列)も足かせとなっていく。

特殊潜航艇5隻に乗り組んで戦死した9人は、軍神として、朝日・読売・東京日々各新聞が大々的に美化して書き立て、「玉砕」イコール英雄的行為という価値付けを日本国民に対して行った。さらに、以後の特攻兵器開発の原点にもなった。

三

アイゼンハワー将軍やパットン将軍の名は、連合国の英雄として知らない者はないだろう。

しかし、ソ連軍のゲオルギー・ジューコフ将軍とリヒャルト・ゾルゲに対する評価はあまりにも低いと思われる。歴史的に見て、第2次世界大戦における彼らの功績はその2人の将軍にまさるともおとらない、偉大なものである。

ゾルゲはドイツ人ジャーナリストとして1933年に来日し、1941年、日本の憲兵隊に逮捕され

るまでの間、ソ連に対する日本の政策を観察し日本がソ連を攻撃するかどうかを綿密に研究した。彼は共産主義による世界革命をめざすコミンテルンの同志だったのである。ゾルゲは東京で密かに諜報組織を作り上げたが、なかでも朝日新聞記者から近衛首相のブレーンを務めた、中国問題の専門家尾崎秀実の存在が重要であった。またゾルゲは駐日ドイツ大使のオットに信頼されていたので、ドイツ側の機密もやすやすと入手できた。

ソ連は、日本の傀儡国家満州と長い国境線を接するため、ドイツと日本とどちらの情報も欲しかった。

というのは、1939年5月～8月に満蒙国境でノモンハン事件という国境紛争（ソ連側ではハルハ河事件）が起こり、ソ連は日本に勝利したが日ソ間の緊張は高まっていたからである。

一方ヨーロッパでは、独ソによるポーランド分割後両国は直接国境を接することになり、こちらの緊張も高まっていたのだ。とくに日独伊三国同盟成立後は、ソ連は東西二正面で敵対関係を持ったため、スターリンは1941年4月、日ソ中立条約を結んで極東の驚異を除こうと考えた。ゾルゲからの報告で、ドイツ軍が東部国境に80個師団を配置させたことを知ったからである。

しかしスターリンはこの後ゾルゲが送り続けた、独ソ開戦に関する機密情報を疑わしいとして斥けてしまった。ところが1941年6月22日、ヒトラーはソ連に侵攻したのである。これでゾルゲ情報の正確さが証明された。

以後、ドイツから日本政府に対し対ソ攻撃の申し入れがあったことを掴んだゾルゲは、尾崎とともに日本に南進策を取るよう秘密工作を始める。この工作は成功し、近衛首相も南進に同調、1941年7月2日の御前会議では南部仏印進駐と独ソ戦不介入が決定された。この情報は尾崎からゾルゲへ、そしてソ連首脳部へと伝えられ、スターリンはこの情報を信用した。その結果、モスクワに迫るドイツ軍に対し、極東シベリア軍団20個師団を振り向けることができ、対独反撃のきっかけとなった。ゾルゲの情報がヒトラーの野望を挫いたのである。

この極東シベリア軍団を率いていたのが、戦車戦のスペシャリストでノモンハン事件で関東軍を痛めつけたジューコフ将軍であった。

彼は武辺一辺倒の荒武者タイプではなく、ノモンハン事件で勝利すると日本軍を深追いせず兵力の無駄な損耗を防いだり、国境を越えて日本軍の動向を探るスパイを放ったり、また、西部戦線へ兵力を大移動させるのを悟られないよう偽装工作したり、という緻密な頭脳の持ち主であった。ただ、戦術面では、

兵の損失よりも作戦目的の遂行を第一と考える非情さもっており、これは冷酷なスターリンでさえ一目置くほどであったという。

第2次世界大戦を通して、彼の軍功は抜群であった。

彼が指揮したのは、1939年のノモンハン事件を皮切りに、レニングラード攻防戦、モスクワ攻防戦、スターリングラード攻防戦、クルスク攻防戦、ドイツ中央軍を破った大反攻作戦、ドイツ本土侵攻作戦であるが、これらのすべてに勝利し、ベルリン占領時は占領軍最高司令官であった。ソ連邦英雄の称号も受けた偉大な功績は、連合軍総司令官のアイゼンハワーと並び賞せられるといっても過言ではないだろう。一方ゾルゲも1944年に日本で処刑されたが、死後20年を経てソビエト英雄の称号を得ている。

ここで本稿を総括しておこう。

私達日本人が後世に伝えるべき昭和史、その歴史認識とはけっして、極東国際軍事裁判の判決ではない。

アイゼンハワーとスターリンが西と東からヒトラーを追い詰め、この稀代の悪魔的指導者を破滅させて世界平和をもたらすことができたのはなぜか。

日本の指導者達が一部の例外を除いて無知無能だったとのそしりは甘んじて受けよう。しかし、日本が対ソ戦を諦めて南進政策をとり、アメリカが対日経済制裁を打ったため、日本軍は真珠湾攻撃を行った。その結果アメリカが参戦し、ジューコフ将軍が独ソ戦に加わった。

日本は枢軸国でありながら、こと志を違え、結果として悪の権化たるヒトラーを滅ぼす、すなわち世界平和のための貢献を成したのである。そして、第2次世界大戦を終結させさらに重ねたであろう多くの犠牲を食い止める一翼を担ったのである。

戦後65年を迎えた今、犠牲者のご冥福を祈りつつこの小考を記してご叱正を仰ぎたい。